本当の好きを大事にできる社会へ

錦城中学校　二年　八木（やぎ）　柊音（しゅうと）

僕の親せきのお兄さんは、七五三にピンクの着物が着たいと言ったら、「男の子の着物にピンクはない」と言われてがっかりしたそうです。

お姉さんはかっこいいものが好きで、将棋も強いのですが、「女の子らしくない」とクラスの女子に言われて悲しかったそうです。

同級生は女の子と仲良くしていたら「男のくせに女子と仲良くしている。」とからかわれて、お互い気まずくなって話もできなくなってしまったそうです。

僕は小さいころプリキュアが好きでドレスが着たいと言ったら、おばさんが縫ってくれてすごく嬉しかったです。幼稚園の頃は、髪の毛を伸ばしたくて長くしていましたが、小学校に入って「女の子みたい」と言われたのをきっかけに、お母さんがいじめられたらと心配したので、切ることになりました。

みんな小さい頃は女の子だから・男の子だからという事を考えずに、好きなものを選んでいると思います。なのにいつの間にか「男らしい・女らしい」という基準で物事を考えてしまうようになりました。親せきのお兄さんは、もうピンクを着たいとは言わないし、僕も今髪の毛を長くするかと聞かれれば、ちょっと恥ずかしくて選べません。

いま『多様性の時代』と言われていますが、僕たちの親世代は「男らしく・女らしく」と育てられていました。その前の祖父母・曾祖父母はもっとその考えが強い世代です。その人たちに育てられた僕たちは、まだまだその考えから抜け出せていないと思います。実際に同級生と接していても、男女の差というものを感じる場面が多々あります。

でも、年長の人達から話を聞くと「男だから・女だから」と区別されて、とても悔しい思いをした経験を持っています。曾祖母は92歳で亡くなる直前まで、「女に学問はいらないと言われてたけど、大学に行ってみたかった」と言っていました。でも世の中の常識がそうだから仕方ないと、自分を納得させているのです。でも、何十年たってもそのモヤモヤは心

の中に残っています。

いま『性別によって、差別されることのない世の中に』という動きが盛んになっています。ただ、何百年と続いた価値観をひっくり返すのは大変なことだと思います。それでも、みんな「性別にとらわれない事は良い事だ」という意識は持っているはずです。そうした流れの最前線にいる僕たちは、意識を変えていき、声を上げ続けていく必要があります。そして、さらに一歩進んだ次の世代につなげていけるようにしたいと思います。

僕は『男らしく・女らしく』もいいと思います。それが好きな人は、選んだらいいと思います。ただ、それを絶対に正しい事として、全員をその枠に押し込めるのではなく、自由に色々と選択できるようになればいいと思います。

僕がドレスをもらった時の喜びや、好きな髪型で過ごせた楽しさを、ずっと大事にできる世の中になればいいなと思います。